ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.136

D8.4 衣服　ニブフ 108.9cm
収集地：ロシア・サハリン州ポロナイスク市、1996年収集

ニブフの民芸作家エヴゲーニヤ・オーカワ氏(1978～)の作品。1996年にサハリン州ポロナイスク市のアレクサンドル・オリホヴィク市長（当時）より当館に寄贈された。紫色の生地に布製のボタンがあり、裾（すそ）に金属製の垂れ飾りのつけられた長衣。襟（えり）ぐりや裾に施された黒の生地にサテンステッチの刺繍（ししゅう）が映える。製作者のオーカワ氏は、現在もポロナイスクに住み、市立第3学校で一般教科として技術を教えながら、同校の北方民族伝統技術コースで、ニブフの伝統芸術を次世代に伝える仕事をされている。姓のオーカワは､サハリンが日本領だった時代に先住民族が日本姓をつけられた名残である。

目次　Contents

1　表紙　衣服
2　企画展「カザフの工芸ー伝統の意匠　現代の手仕事」
3　講座「カザフの装飾文化」
　／講習会「カザフの工芸」
4　ロビー展「北の状景から」
　／講座「北グリーンランドの犬ぞり文化」
5　報告 2024年度新収蔵資料
　／参加報告　ホリデーイベント「動物の毛皮に触ってみようーアイヌ民族と北方先住民族の毛皮利用を知る・触るー」
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

令和6年度企画展

カザフの工芸
―伝統の意匠　現代の手仕事

2025.2.1（土）～

協力：廣田千恵子氏、カブディル・アイナグル氏

カザフは、伝統的に中央アジアの草原地域で遊牧に携わってきた民族です。遊牧生活のなかで、女性の手仕事として壁掛け、敷物、織物などが作られてきました。そうした工芸品には様々な色彩のカザフ文様が施され、移動式住居での生活を快適に保つとともに、その内部を鮮やかに彩ってきました。本企画展では、モンゴル国西部・バヤンウルギー県に暮らすカザフの工芸を取り上げ、伝統的な装飾文化と近年の新たな展開について紹介しています。

カザフの伝統的な生業

カザフは、伝統的にヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなどの家畜を飼い、移動式住居で季節ごとに移動する遊牧生活を送ってきました。

このコーナーでは、バヤンウルギー県の自然や遊牧風景の写真、伝統的な衣服や鞍を展示しています。

カザフの工芸―装飾文化

カザフの移動式住居「キーズ・ウイ」の内部は、手の込んだ装飾がほどこされた工芸品で埋め尽くされています。こうした装飾はおもに女性の手仕事として受け継がれてきました。もっとも一般的な装飾の方法は刺繍（ししゅう）です。針やかぎ針を使い、壁掛け「トゥス・キーズ」やフェルト製の敷物にカザフ文様が刺繍されます。

壁掛けには、全体にびっしりとカザフ刺繍が施されています。装飾だけではなく、寒さやほこりを防ぐ役割を持っています。かつてはフェルトで作られていましたが、社会主義時代に現在のようなものになったとのことです。母から結婚する子どもに贈る家財道具のひとつで、その制作は母親の大切な仕事とされてきました。一般的な大きさの壁掛け（縦130cm、横220cmほど）を仕上げるのに平均2～3ヶ月かかります。

写真1. カザフの壁掛け「トゥス・キーズ」

移動式住居の内部を飾り、要所を縛るために、帯状の紐（ひも）が使われます。紐の幅は数cm～40cm程度と様々で、鮮やかな色の糸でカザフ文様が織り込まれています。そして、移動式住居への砂やネズミの侵入を防ぐため、植物の茎を織った筵(むしろ)筵（むしろ）が作られます。茎に色糸を巻き付けてから織ることによって、カザフ文様や幾何学文様が表現されます。

このコーナーでは、1960～90年代に製作された5点の壁掛け、さまざまな色合いの織り紐、筵、フェルト製マットなど、カザフの住居を彩ってきた工芸品を展示しています。

作り手の誕生―カブディル・アイナグル

カブディル・アイナグルさんは、現地ではカザフ刺繍の名手として知られた存在です。子どものころから母親の姿を見て刺繍や縫物に親しみ、劇団の衣装担当などとして働いた後、ウルギー市にカザフ刺繍専門店をオープンしました。刺繍製品の制作と販売の傍ら、当時衰退していたカザフ刺繍の保存・普及活動にも携わるようになりました。現在は自宅で制作活動を続け、オリジナル文様を創ったり、新たな工芸品を商品化したり、また日本人作家と連携してアート作品を作る試みなどにも意欲的に取り組んでいます。

このコーナーでは、アイナグルさん製作の壁掛け、刺繍絵、フェルト製マットなどを展示しています。

写真2. アイナグル氏製作のフェルト製マット

カザフの工芸―現代の手仕事

近年、カザフ工芸は新たな展開をみせています。アンティークの工芸品をリメイクした製品や、新たな工芸品も創り出されています。

このコーナーでは、壁掛けをリメイクしたコートや小物入れのほか、新たにカザフ刺繍を施したバッグやポーチ、移動式住居をカザフ文様で表現したティーポットカバーなど、新たな工芸品を展示しています。

展示では、アイナグルさんが実際にカザフ刺繍をしている様子を撮影した映像も上映しています。魔法のような速さでカザフ模様が刺繍されていく様子に、多くの来館者が驚いています。　（学芸グループ　中田篤）

講習会

カザフの工芸

2025.2.28（金）

講師：

カブディル・アイナグル氏（カザフ刺繍伝承者）
廣田千恵子氏（北海道大学学振特別研究員）

2月28日にカザフ刺繍（ししゅう）の講習会を開催しました。カザフ刺繍は、木枠を使って布を固定し、かぎ針を用いて刺繍を進めるのが特徴です。移動式住居の内部を飾る、壁掛け「トゥス・キーズ」も、この方法で作られています。

今回は、このユニークな技法を学ぶ機会として、初心者の方々を中心に講習会を開きました。

用意したのは布と刺繍糸と、そしてタコ糸です。布にはあらかじめ、練習用の文様を描いておきました。

講習会では、タコ糸を用いて布を張る作業からはじめました。布の端から1cmほどのところに、上から下へと針を動かして、木枠にくくっていきます。糸と糸の間隔は5cmほどです。このときに、布の張りが弱いと刺繍をするときに支障があるので、叩くとよい音がするほどに布を張ることが肝要です。

カザフ刺繍で使う針は、かぎ針です。このかぎ針を表からさして、裏でかぎ針の先に刺繍糸をひっかけて引き出し輪をつくります。そしてこの輪のなかに、またかぎ針をさして、また裏で刺繍糸をひっかけ引き出すということを繰り返していきます。見た目はチェーンステッチになります。

右利きの場合、足と腕で木枠を固定し、右手でかぎ針を布にさして、左手で刺繍糸を操ります。左手の親指と人差し指で刺繍糸をつまみ、薬指にかけた糸をかぎ針の先にかけるという具合なのですが、それがなかなかうまくいきません。講師のアイナグルさんは、いとも簡単に布に刺繍していきますが、参加者のみなさんは特に、刺したかぎ針を布から引き出すという部分で苦労されている方が多かったようです。

それでも講師の丁寧な指導に、一目もすすまないという方はおらず、カザフ刺繍の奥深さに触れる時間となりました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

カザフ刺繍の実演をするカブディル・アイナグル氏

講座

カザフの装飾文化

2025.3.1（土）

講師：

カブディル・アイナグル氏（カザフ刺繍伝承者）
廣田千恵子氏（北海道大学学振特別研究員）

前日の講習会に引き続き、カブディル・アイナグルさんと、廣田千恵子さんを講師にカザフの装飾文化に関する講座を開催しました。 本講座では、カザフの伝統工芸や装飾文化が彼らの生業にいかに結び付いて発展し、現代に受け継がれているのかについて紹介されました。

講座の前半では、カザフの歴史と装飾文化について詳しく解説されました。 カザフというと、カザフスタンが思い浮かびますが、アイナグルさんがモンゴルにお住まいのように、中国やトルコなどカザフは広い範囲に暮らしています。イスラム教徒であり、遊牧を生業とし、テュルク系の言語であるカザフ語を話してきました。

モンゴルに暮らすカザフは19世紀にロシア帝国から現在の中国・新疆ウイグル自治区に入り、さらにアルタイ山脈を越えて、現在の居住地・モンゴルのバヤンウルギー県にたどり着いた人たちです。

講座ではまず遊牧民である彼らが、農耕民との交流を通じて知った布素材や技術がカザフの工芸に与えた影響について説明されました。イスラムの影響は、抽象的な文様の繰り返しに現れています。また豊かさの象徴として、しばしば羊が文様のモチーフになっています。ソ連時代には、カザフが作る手工芸品には、赤い星や鎌と槌、麦など当時の流行文様がほどこされていました。

講座の後半では、アイナグルさんが、自身の刺繍作品への思いを語りながら、刺繍の技法を実演されました。

子どもの頃から刺繍や手仕事に関心のあったアイナグルさんは、10歳ころから刺繍をしていたそうです。社会主義から市場経済体制へと移行するなかで、いまではあたりまえになっている、装飾品・調度品の観光客等への販売をはじめ、伝統的な文様だけではなくオリジナル文様を施した商品も生み出しています。

日本でもカザフの装飾文化について少しずつ知られるようになっていることを、アイナグルさんはとてもうれしいと語りました。

講座では刺繍以外に、フェルト工芸のことや、最近手掛けている刺繍絵にもふれ、カザフの装飾文化の広がりについて感じられる講座となりました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

ロビー展

オホーツクシリーズ18 北の状景から

2025.1.4（土）-1.19（日）

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の18回目として、この時期恒例の写真展「北の状景から」を開催しました。このロビー展では、オホーツク地域で撮影されたアマチュア・カメラマンの作品を展示してきました。今回は、関根健太郎さん、中村正史さん、山田丈司さん、ALCさん、serikaさんから、計40点の作品を出展していただきました。

関根さんは、能取岬周辺で撮影した写真に絞り、さまざまな表情の海、そこで見られる野鳥などの作品を出展してくださいました。網走市民にとっては身近な場所ですが、その豊かな自然に改めて気づかされました。

ALCさんの作品は、いろいろなシーンで存在感を放つ女性を捉えたものが多く、街中で撮影された写真も含まれます。大自然のイメージが強いオホーツクですが、街や人の存在感をも生き生きと伝える作品です。

山田さんの作品も人物が被写体となっています。一般的なポートレートではなく、砂浜に突き刺さったフレームで被写体を切り抜くなど、実験的な作風が印象的でした。

中村さんの作品は、シマフクロウ、キタキツネ、エゾモモンガといった野生動物が森のなかで自由にふるまう様子を捉えています。人の暮らしのすぐ隣に野生動物の世界がある、その距離の近さを実感させられます。

serikaさんの写真は、自然の風景、そして女性を主人公とした作品が中心です。目を引く風景や特殊技術を使っているわけではありませんが、女性の目線や表情など細かな部分に注意が払われてる作品と感じました。

本ロビー展を通じ、近隣にお住いの方々だけでなく、たまたま立ち寄られた観光客の皆様にも、オホーツクの状景を楽しんでいただきました。　（学芸グループ　中田篤）

展示室の風景

講座

北グリーンランドの犬ぞり文化

2025.1.12 10:00-11:30

会場：当館講堂

講師：日下　稜　氏

（北海道大学低温科学研究所学術研究員）

講師の専門は氷河や氷床の自然科学的な研究ですが、現地調査の傍ら、グリーンランドに暮らすエスキモーの伝統的な狩猟文化にも関心を持ち、情報収集を続けておられます。今回の講座では、北グリーンランドの犬ぞりに関連するさまざまなトピックを紹介していただきました。

最初に、日本人にはあまり馴染みがないグリーンランドという島について、その位置、面積や人口、そこに暮らす人びと、シオラパルクやカナックといった北部の村の様子などについてお話しいただきました。

次に、いよいよ犬ぞりについての解説です。グリーンランド内の地域や用途による犬ぞりの形や大きさの違い、そりを牽引する犬の頭数やつなぎ方の特徴について、詳しい説明が続きました。さらに、そりに載せて運ばれるものとそりで引っ張るもの、狩猟の際の移動手段としても犬ぞりが使用されていることなどが紹介されました。

また、かつて北グリーンランドには犬ぞり以外の交通手段がほとんどなかったこと、1970年代にはコペンハーゲンとアメリカ空軍基地があるチューレという村を結ぶ空路が定期運航され、それに合わせてチューレからカナックまで人や物資を運ぶ犬ぞり部隊が編成されていたことなど、犬ぞり利用の歴史についての解説もありました。

さらに、「日本人が支える犬ぞり文化」として、極地探検家として知られる植村直己さん、シオラパルクに暮らす大島育雄さんと犬ぞりの関わりについても取り上げられました。大島さんは、毎年数十本もの犬ぞり用ムチを作っており、グリーンランドにおける伝統文化継承の一端を担っているということです。

講座では、犬ぞり用の鞭（むち）、革紐（ひも）、手袋など、犬ぞりに関連する道具類や動画を使いながら説明していただき、参加者にも好評でした。

（学芸グループ　中田　篤）

日下稜氏

2024年度
新収蔵資料

北方民族博物館では、毎年北方諸民族に関連する資料を収集しています。収集する資料には、衣類や生活用具、工芸品などの実物資料、北方諸民族の伝統的な文化や現在の状況などを記録した映像資料の二つのタイプがあります。また、その他に一般の方からのご寄贈も受け入れています。2024年度は、実物資料45点、映像資料2点を収集し、14件の寄贈を受け入れました。

今年度の実物資料は、多くがグリーンランドと北アメリカ・アラスカ州で収集されたエスキモーの工芸品や土産品、アクセサリーなどです。大型の資料として、グリーンランドからエスキモーの犬ぞりを収集しました。それ以外には、モンゴルからトナカイ牧畜民ドゥハの工芸品、カザフの刺繍製品などを収集しました。

映像資料は、「ピブロクト」（38分）、「ディタッチド」（64分）の2本で、いずれも東京ドキュメンタリー映画祭2023で上映された作品を収集しました。「ピブロクト」は、ロシア北東部の北極海沿岸、チュクチ自治管区における先住民の現在の生活を記録したドキュメンタリーです。「ディタッチド」も同地域に暮らすチュクチを取り上げています。かつてツンドラでトナカイを遊牧していたチュクチの多くが、現在は街に定住していますが、そこでは高い自殺率やアルコール依存が問題となっています。この作品では、彼らが置かれた困難な状況を取り上げています。

これらの映像資料は、「北方民族博物館シアター」と名付けた上映会で年に2～3回公開しており、他に館外のイベントや研究会などに当館スタッフが持参して上映するという形で活用しています。

寄贈資料は、北方地域の民族学・言語学に関する学術書、ロシア極東やシベリアで収集されたウデヘ、ナーナイ、サハなどの工芸品や土産品、道内で入手された北海道アイヌやウイルタの木偶、刺繍製品、衣類などです。

こうした収蔵資料は、北方諸民族文化を後世に伝える財産として永く保存するとともに、今後の研究活動や展示・普及活動など、さまざまな方法で活用していきたいと考えています。　（学芸グループ　中田篤）

グリーンランドの犬ぞり（撮影：日下稜氏）

ホリデーイベント
動物の毛皮に触ってみよう

―アイヌ民族と北方先住民族の毛皮利用を知る・触る―

共催：国立アイヌ民族博物館・ArCS II（北極域研究加速プロジェクト）沿岸環境課題

2025.2.8、2.9 両日10:00-15:00

会場：国立アイヌ民族博物館　1階　交流室

寒冷地に暮らす人びとにとって、動物の毛皮は衣類を始めとするさまざまな生活用具の素材としてなくてはならないものでした。また、美しい毛皮は、中国やロシア、ヨーロッパとの交易品としても重要な存在でした。本イベントは、北方地域の毛皮や毛皮製品を触ることを通して、その機能性やデザインを体感するとともに、人と動物との関わりを知っていただくことを目的として企画・開催されました。

会場となった国立アイヌ民族博物館の交流室には、動物の種類や用途、生息地別に「アザラシ」、「シカ類」、「肉食獣」、「毛皮獣」、「北海道の動物」の5つのテーブルを置き、それぞれに関連する動物の毛皮や毛皮製品など、約30点を配置して来場者が自由に触れるようにしました。

このうち「毛皮獣」のコーナーには、夏毛と冬毛のホッキョクギツネやクロテンの毛皮、アカギツネやホッキョクギツネ毛皮製の帽子、ビーバーの毛皮を装飾に使った手袋やブーツなどを展示しました。

「北海道の動物」コーナーには、エゾヒグマやエゾシカ、ゴマフアザラシなど北海道に生息する動物の毛皮を並べました。また、それらの肉の味について、食べた経験を持つウポポイ職員・川上将史（トゥッカンタム）さんによる「グルメレポート」を表示しました。

その他、罠（わな）でクロテンを獲ったり、アザラシを銛（もり）で突く猟を体験したりするコーナー、北方諸民族の狩猟や毛皮加工の様子を記録した映像の上映コーナーなども設けました。

会場には、2日間で計666人の来場者がありました。普段なかなか手に取る機会がない毛皮の感触に驚いたり、毛皮製の帽子をかぶって写真を撮ったり、アザラシ猟の体験をしたりするなど、さまざまな形で毛皮と触れていただくことができました。　（学芸グループ　中田篤）

「北海道の動物」コーナーと川上将史氏（左）

ロビー展　「ソ連・ロシアと東欧のマッチラベル」

シンプルでわかりやすいメッセージ性のあるソーシャリズム・リアリズムとも呼ばれるソ連・ロシア・東欧のマッチラベルデザインの魅力をお見せします。

会期：令和7年(2025年)4月26日(土)～5月18日(日)
会期中の休館日：4月29日、5月6日、12日
会場：北海道立北方民族博物館・ロビー
観覧料：無料
協力：ありよしきなこ氏

ソ連国民経済達成博覧会
「幼児玩具」

子どもの線路侵入禁止

国際女性デー祝賀

「北海道立北方民族博物館研究紀要」第 34 号

目次：
<研究ノート>
・服部文庫公開シリーズ11　日本人によるアリュート民族の研究(7)：服部健「アリュート語資料」(5)大島稔、野口泰弥
<調査報告>
・樺太アイヌ語タライカ方言のウチャシクマ2篇　村崎恭子
・トビニタイ文化期の石器組成について　村本周三
・モンゴル、ダルハド盆地の環境変化に関する地域住民の認識　中田篤
・ウデヘ語イマン方言の料理と食材に関する語彙　宮川琢
<資料>
・のるりすと　2024―北方研究データベース―　笹倉いる美
発行日：令和7年3月21日

報告

令和6年12月6日付で、当館は文部科学省科学研究費助成事業指定研究機関に指定されました。

INFORMATION

行事報告

◆12月20日(金)、「ロビーコンサート2024 ～青少年のための室内楽の夕べ～ハイドンの世界」(出演：札幌交響楽団員)(主催：一般社団法人北方文化振興協会、一般社団法人山田記念青少年育成財団)を開催しました。

ロビーコンサートの様子

◆1月11日(土)、講習会「はじめての歩くスキーツアー」(講師：中田篤主任学芸員、網走スキー協会会員)を開催しました。北方民族のスキーも紹介するイベントになりました。

天気に恵まれ、スキー日和でした。

◆2月1日(土)はくぶつかんクラブ「まが玉づくり」(講師：平栗美紅解説員)を実施しました。参加者は石を耐水ペーパーで磨いて、オリジナルのまが玉を熱心に作りました。

きれいに出来たね！

◆2月11日(火・祝)、第35回北方民族博物館開館記念感謝DAYとして、北方モチーフ簡単マグネット作り、かんじき体験、無料開館を実施しました。

おしるこもふるまわれました。

かんじき体験の様子

学芸員実務実習

◆1月28日(火)～2月2日(日)、2024年度の北方民族博物館学芸員実務実習として4名の実習生を受け入れました。

北方民族博物館だより
No.136
令和7年(2025年) 3月19日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会